

第５０回 荒川太郎右衛門地区自然再生協議会
議 事 録

- 日時 : ２０２０年２月６日（木） １３：３０～１５：３０
- 場所 : 上尾市文化センター ３０１集会室

●資料

議事次第

- 資料－１． 第４９回荒川太郎右衛門地区自然再生協議会議事録
- 資料－２． 「荒川太郎右衛門地区自然再生事業 自然再生全体構想」改訂について
- 資料－３． ２０１９年度の協議会と各組織の進捗と予定
- 資料－４． 台風第１９号による影響
- 資料－５． 生態系モニタリング専門委員会の活動
- 資料－６． 維持管理・環境管理専門委員会の活動
- 資料－７． 広報ワーキングおよびイベント実行委員会の活動
- 資料－８． 協議会活動協力者への感謝状授与と表彰規程について
- 資料－９． ２０１９年度収支報告と２０２０年度活動予算（案）
- 資料－１０． ２０２０年度の協議会と各組織の予定
- 参考資料－１． 「荒川太郎右衛門地区自然再生事業 自然再生全体構想」改訂
- 参考資料－２． 協議会設置要綱
- 参考資料－３． ２０１９年度のモニタリング結果（中間）
- 参考資料－４． 目標種の選定と整備の経緯
- 参考資料－５． 東京デザイン専門学校 プレゼンテーション報告

【議事結果】

- ① 「荒川太郎右衛門地区自然再生事業 自然再生全体構想」改訂について承認する。
- ② 生態系モニタリング専門委員会に関する協議会への提案事項（２０２０年度のモニタリング計画等）について承認する。
- ③ 維持管理・環境管理専門委員会に関する協議会への提案事項（２０２０年度の維持管理活動計画等）について承認する。
- ④ 広報ワーキングおよびイベント実行委員会に関する協議会への提案事項（２０２０年度のイベント・広報活動計画等）について承認する。
- ⑤ 協議会活動協力者への感謝状授与と表彰規程について、具体的なケース想定や授与方法は、維持管理・環境管理専門委員会で検討し、協議会に諮ることとする。
- ⑥ ２０１９年度収支報告と２０２０年度活動予算（案）について承認する。
- ⑦ ２０２０年度の協議会と各組織の予定について承認する。
- ⑧ 資料に示すスケジュールは最低限粛々と行い、その他の自然再生活動に寄与する取組については、協議会の開催を待たずに積極的に進めていく。
- ⑨ 具体的な進め方については、来年度早々に運営委員会を開催し調整する。

【主な議事内容】

- 第4回荒川太郎右衛門地区自然再生協議会議事録について
(質疑応答なし)。

- 「荒川太郎右衛門地区自然再生事業 自然再生全体構想」改訂について
 - ・ 荒川太郎右衛門地区自然再生事業 自然再生全体構想」改訂について承認する。

- 2019年度の協議会と各組織の進捗と予定について
 - ・ 桶川西高校、東京デザイン専門学校、大和ハウス工業などに参加いただいている、今後、S財団とも連携の可能性があることは重要なポイントである。

- 台風第19号による影響
 - ・ 台風第19号で秋イベントは中止とした。川は洪水があつてこそその川であり、全国の河川の自然再生は平常時のことばかり考えた箱庭の自然再生が多い。川の環境は洪水も含めて河川環境であることを前面に出していきたい。

- 生態系モニタリング専門委員会の活動について
 - ・ 生態系モニタリング専門委員会に関する協議会への提案事項（2020年度のモニタリング計画等）について承認する。
 - ・ モニタリングデータが蓄積されており、科学的にうまく使えば自然再生協議会の重要なポイントになる。学校に働きかけて環境教育に活用する。また、協議会で自ら活用していくこともできる。

- 維持管理・環境管理専門委員会の活動について
 - ・ 維持管理・環境管理専門委員会に関する協議会への提案事項（2020年度の維持管理活動計画等）について承認する。
 - ・ 江戸時代は、この地域に普通にシカがいた。現在は農業被害を理由に下池でワナが設置されている。自然再生地におけるシカの扱いについては、協議会で議論しておく必要がある。また、当自然再生地は、銃・鉛散弾による狩猟は禁止されているが、鳥獣保護区とはなっていない。鳥獣保護区指定に向けた取り組みを始めていきたいと考えているが、地元の合意が必要となってくる。

- 広報ワーキングおよびイベント実行委員会の活動について
 - ・ 広報ワーキングおよびイベント実行委員会に関する協議会への提案事項（2020年度のイベント・広報活動計画等）について承認する。
 - ・ 東京デザイン専門学校からいただいている多くのアイデアを利用し、次年度以降に活用していく。

●協議会活動協力者への感謝状授与と表彰規程について

- ・ 協議会活動協力者への感謝状授与と表彰規程について、具体的なケース想定や授与方法は、維持管理・環境管理専門委員会で検討し、協議会に諮ることとする。

●2019年度収支報告と2020年度活動予算（案）

- ・ 2019年度収支報告と2020年度活動予算（案）について承認する。
- ・ 備品は添付リストにより管理しているが、監査意見を踏まえ、今後は備品番号を付して管理する。

●2020年度の協議会と各組織の予定

- ・ 2020年度の協議会と各組織の予定について承認する。

●意見交換

- ・ 東京デザイン専門学校など新しい取り組みはあるが、全国での取り組みと同様の活動が毎年繰り返されている。メニューが決まっている観察会や外来種駆除は、粛々とやるべきことではあるが、それだけでは、この協議会は尻すぼみになってしまう。太郎右衛門が生き残っていくためには、他と違う活動を盛り込んでいき、なるほどと思わせることが必要である。
- ・ 鳥獣保護区の件は、行政を含めて議論していく必要がある。
- ・ 鳥獣保護区は、上尾市でも6.3haしかなく、少なすぎる。
- ・ 川の氾濫によって有機物が供給され農業が盛んになると小学校の時に勉強したことを今でも記憶している。川が氾濫して自然が豊かになることを言い続けることが必要である。
- ・ 川の自然を生かすのが良いのか、川を治めるのかは、まだまだ議論が必要である。川は暴れん坊だが、そうした川の自然を大事にしすぎると付き合いにくくなる。川の自然とどのように付き合うのか、川の自然をどう理解するのが重要である。
- ・ 組織改革をして、いろいろな立場の人を集めることが大事である。我々だけの感性では、狭いところがある。話し合いで自然再生として許容できることを決めるとともに、先進的な取組を毎年一つは行い、周りを巻き込んでいく。
- ・ 協議会の開催は年2回で、かつては60人くらいが参加した。来ない人、辞めた人はそれぞれ理由がある。いろいろな考えがあるが、そうしたニーズに答えることができていないと考えている。また、以前は協議会を土日に開催していた。市民団体にとって土日は、貴重な活動時間だが、一般の方が参加や傍聴に来るなら土日が良い。協議会の回し方の仕組みを運営委員会で議論してはどうか。
- ・ 大和ハウス等来てくれてありがたいが、小さい団体も来られるようにした方が良いと思う。
- ・ 河川事務所は、治水の仕事と環境の仕事でやり方を変えなければならない。環境の仕事は、一つ一つ違い、わからないことが多い。したがって、実際の判断は、事務所、コンサルタント、協議会で判断しなければならないが、今は細かい話ができていない。細かい話しをする場があっても良いと思う。
- ・ 千葉県野田市で放鳥したコウノトリを追いかけ、毎朝、渡良瀬遊水地に行く。鴻巣市や太郎右衛門にも来てもらいたいと思っている。渡良瀬遊水地には仮設トイレがたくさんあり、水

洗トイレもある。朝7時から駅と町を往復しているバスもあり、市民が気軽に来られる環境だと思う。地元の人が太郎右衛門に足を運びやすくなるように活動支援することが必要である。

- ・ 協議会の人が減っているのはPRが足りていないのもあるが、地元の人に声かけするため、自治体に頑張ってもらいたい。
- ・ つばさ北小学校の家族の方に、孫から活動を聞いていると言われた。小学生の取組は家族に伝わるし、企業が力になっていることも自治体を通して広めていきたい。
- ・ 立入禁止のところ、手をつけないところを決めても良いと思う。問題なのは、協議会で承認を得るのに1年かかること。もっとスピードアップして早く始められる形にする。また、地元の方に興味を持ってもらうため、歴史の視点も加えて取り組んでいくと良い。
- ・ 組織を再生していくため、荒川上流河川事務所を中心に、自治体を巻き込んでいくべきである。自治体を中心に参加メンバーを集める。例えば、町内会に場所を決めて管理してもらうようなことも考える。
- ・ 自治体では環境基本計画を作成して自然保護に取り組んでいるが、自然再生を具体的に設定するのは難しい。三ツ又沼ビオトープにおいて、上尾市の小学校も環境学習に取り組んでいるが、学校も自治体も自然再生のきっかけに手を挙げるのが次の行動につながる。そのため、職員も環境問題に関心を持ちアンテナを高くしておく必要があると思う。
- ・ 時代も社会構造も変わっている中で、一つの考えに同調を求めることは難しい。ニーズに合わせていくことも必要だと思う。東京デザイン専門学校など若い世代の提案を実行してみることが入口になるのではないか。
- ・ 活用することも大事だが、一番大切なことは太郎右衛門地区の自然再生であり、どう自然再生の役に立つかという視点を持ってほしい。
- ・ 協議会への参加は、地球環境のためだと思っている。荒川上流河川事務所には、気負いを持って自然再生を進めてもらって、どう国民を啓発していくかということに重点を置いてもらいたい。そうしないと自治体も動かない。先進的に国として引っ張ってもらった上で自治体をどう取り込んでいくか考えていきたい。
- ・ 昔と今では自然に対する価値観が変わっている。BBQ、タケノコ取り、白鳥を呼ぶ、景色を新たに作る、そういったことも考えて良いと思う。
- ・ 自然再生という基盤があって、そこをどうやって活用するか、ということが乗っかってこないと維持できない。自然再生という科学的な話に取り組み、色々な形で活用していくことは、自治体も含めて地元を誘導していくために必要である。
- ・ モニタリングデータが集まっており、学校との連携もあるが、協議会から科学的なものを発信していくことも必要である。他地域では、データの蓄積はほとんど行っていないため、差をつける大きなものにできる。
- ・ 太郎右衛門は、多言語の看板を作成し、海外の方へ説明できるようにしてある。羽田からすぐに来ることができる。この場所は留学生が多く、留学生は団結力もあるので、巻き込むことができる。相反しない形で、地の利も生かしながら活動を進めていく。
- ・ エコロジカル・ネットワークの一環として、サクラソウをもっと早く植えたかったが、すごく手間がかかる。タイミングを逃すと1年後になってしまう。里山の農業が衰退していった

のは湿地を動き回って物を作るのが大変だったからであり、それを再生するのは大変だと思う。東京デザイン専門学校もそうだが、いろいろなことを行っていく。アカデミックな自然再生も良いし、皆で自由に行うことは良いと思う。

- 資料に示すスケジュールは最低限粛々で行い、その他の自然再生活動に寄与する取組については、協議会の開催を待たずに積極的に進めていく。
- 具体的な進め方については、来年度早々に運営委員会を開催し調整する必要がある。

以上